

愛の無断駐車

登場人物 男

女

暴走族風の若者 1

2

3

古びたマンションの駐車場。

駐車スペースを区切る白線はとうの昔に擦れ

今やペンキで落書きされたアスファルト。

その駐車場で、毎日の様に犬小屋を作っている男がいる。

板で四角い枠を作り、屋根を打ちつける。

男 ひどい話ですよ、まったく…。だつていきなりですよ。いきなりなんの予告も無しに出て行けたなんて。

その傍らには暴走族風の若者が居る。

若者 1 なんで犬小屋作つてんの？

男 屋根は、青くしようと思えます。

若者 1 …。

男 煙突も付けます。

若者 1 煙突？

男 家と同じにするんです。

若者 1 家持つてるの？

男 いえ。

若者 1 駄洒落？

男 家の屋根も青くするんです。煙突つけるんです。

若者 1 雨降って来たらびしょ濡れだ、犬。可哀想に。

男 何もかも悪いのはあの管理人です。あの管理を黙認している住民は尚悪い。

若者 1 お人好しなんすよ、皆。

男 犬小屋壊すの、止めて下さい。

若者 1 俺知らないよ。

男 あなた方暴走する一族の方がここで集まる日は、決まってそうなんです。作つて、後は塗替えだけの状態で、一晩置いておくと必ず。

若者 1 他所のチームじゃないの。

男 なんにしろ、あなた方暴走する一族の方々の作業なんですよ？

若者 1 その、暴走する一族って言い方やめて下さい、家族じゃないんで。

男 お願いですから、邪魔しないで下さい。

若者 1 で、なんで犬小屋作つてんの？そこに住むの？

男 犬小屋を作れば、それに見合う庭が要りますね。

若者 1 うん。

男 庭が出来れば、そこに家が無いと庭とは呼べんですよ。

若者 1 うん。

男 家には家族があつて、こんな休日の夜には、家族でわいわいすき焼きでもやりたいものです。

若者 1 おじさん、家族居ないんでしょ？

男 はい。

若者 1 で、なんで犬小屋作つてんの？

男 ハナっから家を作ろうつたつて、そりゃあ無理な話ですよ。コツコツとやるタイプです私。この犬小屋は、私の決意の表れであります。

若者 1 ここに家建てる気かよ、おじさん。

男 あんな管理人には負けませんよ、私は。

若者 1 だつて家賃払ってなかったんでしょ？

男 はい。

若者 1 そら、おじさん悪いでしょ。

男 あんな男に家賃なんて、払いたくもない。

若者 1 いや、管理人に払う訳じゃなくて、雇われたよ管理人だつて。

男 第一家賃払える程、私裕福ではないです。

若者 1 働けよ。

男 嫌です。

若者1 おいおい。

男 私は作家になりたいんです。私には、才能がある。

若者1 あ、そ。

男 作家というからには、とにもかくにも家を作らねばなりません。

若者1 おじさん、意味履き違えてるよ。作家っていうのは、家を作る人じゃないよ。

男 まずは、犬小屋です。

若者1 犬は？

男 まだ居ません。

若者1 あのさあ、家族居ないのに家作ったり、犬居ないのに犬小屋作ってどうすんの？順番だつてば。

男 犬飼つてから犬小屋作つたつて遅いでしよう。犬小屋なかつたら、その間犬はどこに寝れば良いんですか？

若者1 家族出来る予定は？

男 犬は、飼います。

若者1 大迷惑だな、その犬。

男 そしたら家も出来ませんよ。

若者1 おじさんの作つてるそれさあ、表に犬小屋つて書いてかないと犬小屋だつて解んないよ。よしんば書いてあつたとしても、中に犬居なかつたらそれだの箱だよ。ただの箱だつたらやつぱりここは庭じゃなくてただの駐車場だよ。壊されても文句言えないつしよ。

男 完成したら犬飼いますよ。完成して犬入れる前に、あなた方一族が壊してしまうんじゃないですか。

若者1 だつたら完成して壊される前に犬入れなよ。

男 今日こそはそうしますよ。今日は徹夜です。

若者1 後さあ、もうちよつと向こうでやってくれない？ここ、ウチのもんつすよ、306号のスペース。

男 ああ、そうなんですか？境界線の白線、ほとんど消えちゃつて、あつてないようなモノですからね。

若者1 だから、どいてよ。

男 今日も、集まる日ですか？

若者1 ブラックエンジェルつて言うんです、俺のチーム。

男 あの管理人は、こういう輩を管理するべきなのに。

若者1 かつこイイでしょ。俺一人なんすけどね。だからエンジェル。エンジェルスじゃないの、エンジェル。
エル。

男 私の506号のスペース使つて頂いて結構です。

若者1 あんたもう、追い出されたんでしょ？

男 はい。

若者1 ダメじゃん。

男 どうぞ、よそへ行つて下さい。

若者1 ちよつとここ、俺のスペース。皆の駐車場なんだよ。

男 うるさい！ここは私の庭だ！！

若者1 ひでえ話

女が力強く歩いて来た。男の目の前で立ち止まり。

女 お話があります。

男 すみません、私は今見ての通り犬小屋を作つている最中なので

女 5分で結構です。

男 申し訳ない。

女 私、非常に困つて居るんです。

男 私も困つて居ます。

女 その犬小屋と私と、どつちが大切なんですか？

男 そりやあ決まつている。

女 じゃあ、話を聞いて下さい。

男 犬小屋です。

問。

女 帰ります。

男 すまんね。

女 帰りません。

男 帰つてくれ。

女 私、迷惑しているんです。

男 君、誰？

女 隣の川崎です。

男 隣つて？

女 505号。

男 ああ、そうですか。初めまして。

女 こっちは初めましてじゃないんです。

男 そうか、お隣さんですものね。あ、私はもうこの住民ではないから、元お隣さんですね。

女 (バックから手紙を取り出し) これ、あなたですよ。こういうの、やめて貰えませんか？

女、手紙を男に突き付ける。

男 いや、私知りませんが。

女 とぼけないで下さい。あなたが私のポストに入れて走って逃げて行くの、ちゃんと見たんです。

男 どれ(手紙を受け取り)？

女 お返しします。

男 いや、私じゃないですね。

女 失礼します！

女、バッグに手を突っ込み中からたくさんの封筒をぶちまけ、去って行く。

入れ代わりに更にもう一人、暴走族風の若者がやって来た。歩いて。

若者2 おい、なに散らかしてんだよ、管理人にどやされつぞ。

男 (敏感に反応して) 君は管理人の手先か！管理する側の人間か！

若者2 (横目で見ながら) 変なおっさん。

若者2、そのまま通り過ぎて行ってしまった。

男 …お友達に、ちゃんと言っておいて下さい。

若者1 友達じゃないですよ、ただのお隣さん。チーム、ブラックキュービット。ダサイんですよ。

男 同じ暴走する一族でしょう。

若者1 だから、暴走族で良いです。

男 君は、どうしてその、暴走族なんか、やってるんですか？

若者1 カッコいいから。女の子なんか、ワーキヤー言いますよ。

男 …。

若者1 モテまくりですよ。

女、戻って来た。段ボール箱を抱えている。

女 これも、全部お返しします。

女、段ボール箱を引っくり返す。

大量の封筒が流れ落ちる。

男 君ねえ…。

女 変態

女、去って行った。

男 ここにはもう、マトモな人間は一人も居ない。

若者1、封筒を手に取り、中の手紙を読む。

若者1 君の豊富な母乳を、是非一度、心ゆくまで揉みだきたいものだ。丸。

男 …なんですか？それ。

若者1 自分で書いたんですよ？

女、戻って来た。更に段ボール箱を抱えている。

男 (手紙を見ながら) あのですねえ、君は何か勘違いをしておられる。これ、私じゃあないですよ。

女 いいえ、あなたです。あなたに決まっています。あなたに決めました。

男 何を言つとんだ君は。

女 (手紙を読む) あー、コホン、君の豊富な母乳を、是非一度、心ゆくまで揉みだきたいものだ。丸。

若者1 (幾つも取り出し) ああ、全部同じ事が書いてある。

女 豊富な母乳って、おかしいですよ。液体揉みだいてどうするんですか。これ、美乳の間違いですよ。ねえ？

男 君、胸無いじゃない。

女 失礼な事言わないで下さいーあのですねえ、私の事が好きなら、こういった陰湿なやり方では無く、もっと正々堂々と愛をアピールして下さいよ、私もそれなりの対応は出来たはずなんです。しかし、あなたのこのラブレターからは、少しもその熱意が伝わって来ない。男なら男らしく、良い歳こいてらつしやるんですから。

女、文面をかきす。

新聞広告などで切り張りされた文字が並んでいる。

男 …不愉快だ、私は。

女 これ、お返しします、全部。

女、段ボール箱をひっくり返す。封筒が雪崩の様に流れる。

男 (女を睨み付け) 散らかすな、私の庭を。

女 (負けじと、睨み返し) お返しします。

男 解ったから、帰ってくれ。

女 帰ります。

男 帰れ!

女、去る。

男 君は全くもって不愉快だ。言い掛かりにも程がある。産まれてこのかた、君程不愉快な女性はいくらだ! だよ! 全くもって久しぶりだ!

男、イライラしながら大小屋を作りだす。

若者1は、幾つも封筒を開け、中の文章を読んでいる。
と、また女が戻って来た。

男 久しぶりだとも!

女 お返しします。

女、今度は段ボール箱を2、3箱、台車に積んで押して来た。

男 一体どれだけ持ってきた、君は。

女 あと一部屋分ありますよ。でも良かった。これですっきりしました。テレビも見れるし、買ったばかりのダブルベッドも、これで置ける様になります。

女、段ボール箱をひっくり返す。ドサドサ流れ落ちる封筒の束。

去って行く女。

男、半狂乱になって、段ボール箱に残った手紙をぐちゃぐちゃにする。

男 バカヤロウ! バカヤロウだな君は! はっはっはっはっはっはっは!

ひらひらと舞い落ちる手紙。

疲れて、封筒の山に腰を下ろす男。

若者1 これ、全部作ったんですか…?

男 私じゃないよ。

若者1 こんなにたくさん…!

男 誰だ、こんな嫌がらせするのは。全くこの住民と来たら。

若者1、突然男に握手を求める。

男、思わず手を出す。

若者1 凄いいじゃないですか。揉みだいでやって下さいよ、心ゆくまで。応援しますよ、俺。

男 いや…、私じゃあないんだけどね。

若者1 やるなあ、ラブレターは、やつぱコレだよなあ。

と、若者2が台車に段ボール箱を乗せて押して来た。

若者2 これ、ここの良いの?

若者1 なにやってんだ、お前。

若者2 しようがねえだろ。なんか、泣いてんだもん、階段のところで。

若者2、封筒の束を箱から封筒の山に移している。

若者1 手、放していいですか。

男 あ、ああ…(放す)。

若者1も手伝う。

若者2 おい、おっさんも手伝えよ。

男 どうして、私が？

若者2 これ、あなたのだろうがよ。

男 だから、言っておきますが、私は今犬小屋を…、あ、そうだ。犬小屋作らなきゃ。

男、犬小屋を作り出す。

若者2 (舌打ち) なんだよ、こいつ。

またまた別の暴走族風の若者が歩いて来た。

若者3 おい、犬小屋！お前、また作ってんのか！意味ねえ事やってんじやねえよ。壊れたら壊れたまん

まにしといてくれよ。

男 君か！犬小屋壊してるのは。

若者3 なんだとこの野郎、管理人だよ。

男 管理人？

若者3 かんかんかんかんうるせえんだよ。夜、壊す音がよお。眠れねえんだよ。

男 …やっぱり管理人か。くそ…。

男、猛然と犬小屋を作り出す。

若者3 だから意味ねえって、どうせ壊されるんだから。

男 うるさい！

若者3 お前等も何やってんだよ。これ、こんなと捨てていいのかよ。指定のゴミ袋に入れねえと、い

つまでも持ってってくんねえぞ。

若者2 うるせえなあ、おめえはよお。

若者3 だって、ルールだぜ。

若者2 良いんだよ。

若者3 何が？

若者2 全部このおっさん持つてくから良いんだよ。

男 (手を止めて) おいおいおい、何を言ってるんだ？

若者2 だってこれ、あなたのものじゃないか。

男 だからね、私は、こんな手紙一通も出した事ないんですから。

若者2 何言ってるんだよ？逆だろうが。

男 …逆？何が逆？

若者2 おいおい、マジで言ってるのかおっさん。逆だよ逆。おっさんが受け取る側だろうが。

男 ……え？

若者2 わかんねえ野郎だなあ(拳を握る)…。

若者3 おいおい、何する気だ？

若者2 わかんねえ奴は殴つときやいいんだよ。

若者3 どう言う事だ？俺もさっぱり解らんぞ。

若者2 だったらおめえも殴つてやろうか？

若者3 おー、やんのかよ？

若者2 やるんだつたらやってやるよ。

若者3 やるんだつたらやってやってもいいけど、やらねえんだつたらやらねえよ。

若者2 どっちなんだよ。

若者3 やらねえよ。

若者2 やらねえのかよ。

若者3 暴力では何も解決されないぞー。

若者3、走って去って行く。

若者2 何モンだ、あいつ。

若者1 チームブラックレッドロープ。

若者2 : ブラック、レッドロープ？

若者1 黒い、レッドロープ。

若者2 どっちなんだよ、赤なのか黒なのか。

若者1 ブラック：

若者2 もういいや。

若者1 赤い紐。

若者2 それそのまんま。どこに住んでんだ。

若者1 307号。

若者2 : お隣さんじゃねえかよ。

男 : 私には、分からない事だらけなんだが。

若者1 おじさん、これ、一つ貰っても良いですか？記念に。

男 なんの記念なのか良く分からないけど、もっそんなものさつとびこかへ捨ててしまつてくれ。

若者2 そんな、モノ？

若者1 : おじさん、それ言っちゃあいけねえよ。

男 : だって、私のじゃないんだから。

若者2 まだ言つてんのか。

若者3、戻つて来た。

若者3 これ、持つてくよ。

若者2 どこに？

若者3 なんか、歌つてんだよ、泣きながら。

若者2 あん？

若者3、台車を押して行つてしまった。

男 君達は、どうして彼女の肩を持つんだい？何か弱味でも握られているのか？色香にやられる程の美貌の持ち主ではないと思うが。

若者2 ぐちゃぐちゃやるせえなあ。なんもん決まつてるじゃねえか。泣いてるからだよ。

男 : ...え？

若者2 他に何があんだよ。

若者1 (うなづき) 泣かせちゃあダメつすよ。

若者1一人、黙々と作業を続ける。

男 しかしね...

若者2 しかしもお菓子もねえよ。持つてけよ全部。んで、返事書け。

男 返事？返事、て言われても...

若者2 ぐちゃぐちゃ言つてねえで書きやあ良いんだよ。全部書きやあいいの。

男 : 断わるよ、私は。

若者2 だったら断わりの返事書けば良いじゃねえか。とにかく書け。書けば解る。全部な。

男 : 全部。

男、ラブレターの山を見つめている。

若者3に押されて、女が台車に乗つてやつてきた。

泣きながら、「聖母達のラフライ」を口ずさんでいる。

男 : 話は、この若者達から聞きました。あの、あなたの気持ちは嬉しいのですが、私には、その気持ちに応えることは出来ない。何故なら私は今、犬小屋を作っている最中なのです。また、家が無いんです。家族を迎え入れる事は、まだ出来ないのです。

若者2 だからよお(男を殴ろうとする)。

若者1、若者2の肩を叩き、首を振る。

若者2 全く情けねえ男だ。

若者達、静かに去つて行く。のかと思いきや、後方でじつと事の成り行きを見守る。

そして、女の歌の続きを口ずさむ。

女 こんな嫌がらせは、今後一切止めて下さい。

男 まだ言つか君は。

女 (手紙を拾い) 君の豊満な母乳を、是非一度、心行くまで揉みだしたいものだ。丸。ひじょーに不愉快です、私は。

男 もう君の話は聞かん。犬小屋犬小屋(作り出す)。

女 なんて下品で、なんてスケベったらしいエロオヤジ。

男 誰がおのれのような貧乳娘の乳を。

女 どー見て言ってるんですか、これでもCはあります。嘘です、Bでした。Aかもしれません。

男 君がAだろうがCだろうが知った事か。君みたいな女性が隣に住んでいた事すら知らなかったんだから。うるさいよ、君達。君達もねえ、暴走族なら暴走族らしく、そんなところで歌なんか歌ってないでち

やんと暴走しなさい、暴走。

女 じゃあこれはなんなんですか？こんなたつくさんのラブレター。

男 これは君が勝手に作った物じゃないか。

女 もう良いです、解りました。

男 すまないね、君の気持ちに答えてやれなくて。

女 いいえ。もうあなたの気持ちは解りましたから、このままこのような嫌がらせが続くのなら、しよう

がないです。結婚しましょう、私達。

男 ああ、そうしてくれ！…なに？

女 ええ、結婚してあげます。ただし、私の胸には触らないで下さい。

男 触りたくもないわ！

女 もういいです。あなたの言っている事は全部反対の事ですもの。本当の気持ちは口が裂けても言えないのよね。

男 君ねえ…

女 子供は3人で良いです。男の子は一人。

男 ちよつと待て、

女 ただし、私の胸には触らないで下さい。

男 …そりゃあ、面白いなあ、どうやって子供を産むんだい。まさか、コウノトリが運んで来るなんて思

つてないだろうね、へへ。

女 やつぱりあなた、私の胸、触るつもりなのね。私のこの美乳が目的なのね。

男 やつぱり阿呆だこいつ。

女 あなたなんかには、死んでも触らせませんからね。例え一つ屋根の下、同じダブルベッドで添い寝を

しようとも、あなたなんかには絶対、絶対の絶対、指一本タリとも触れさせません。

男 よおしわかった！そーごまごま言うのなら、こーししよう、もしも私が君のそのお粗末な乳を触る事が出来

たら、即離婚だ。どつだ！

女 …良いですよ。

男 …よし、……決まりだ。

若者3人 拍手。

男 …大丈夫、作ってもいいかね？

女 手伝います。

男 …すまんね。

男 …すまんね。

男 …すまんね。

男、女の胸を触ろうとするが、

女 ここに犬小屋があると云う事は、ここは庭ね、あなた。

男 え？

女 こんなに大きな犬小屋なもの、よつぽと大きなお庭よね。

男 …(女を見る)。

女 この辺りがリビング？

男 ああ…、そうなるね。

女 南向きで全面ガラス張り。ここが子供部屋でここがあなたの書斎。ここが寝室で、あなたとの為に買

ったお気に入りのダブルベッドを置きましょう。今のマンションじゃ、狭くて他に何も置けないもの。

そして今日のような休日の夜は、皆、わいわいすき焼きでもやりましょう。

男 …君と云う人は、

女 間違えてました？私。

男 …いや、ここはマンションなんかじゃない。

女 え？

男 私が作ってる犬小屋はそんじょそこの貧相な物とは違うんだ。グレートピレニーズが楽に寝転がれ

る位の犬小屋だ。

女 グレート…？

男 こんなくらい、大型犬さ。白い犬さ。

女 あなた、それを飼うの？

男 飼うさ！

女 凄いわ。グレートね、あなた。

男 それに、ここでは、ペット飼えないからね。管理人がうるさいんだ。

警報ブザーの様な音が鳴る。

若者達 管理人だ！

女 私達の犬小屋を、毎晩壊しに来る管理人ね。

男 そうさ、また今晚も壊しに来るんだ。

男、犬小屋を作り出す。

女 負けないで、あなた。

男 当たり前じゃないか！我が家の第一歩、壊されてなるものか。

女 凄いわ。これ、あげる。

女、地面に落ちている大量の封筒を抱え上げ、男に頭から掛ける。

近付きすぎている事に気付き、

咄嗟に胸を隠す。

男 大丈夫、私はもう、君の胸には触らない。

女 え？

男 即離婚だからね。

女 子供は3人欲しいです。

男 解ってるさ。我々は、嫁のおっぱいに一度も触る事なく人生を終える、伝説の夫婦になろうのではないか！

女 あなた。

男 お隣さん。

女 一回くらいなら……

男 さあ、どこからでも掛つて来やがれ！もう誰も私を止められんぞ。がつはつはつは！がつはつは

つはつは！

猛然と犬小屋を作り出す男。

若者達 わっしょい、わっしょい。

2人に封筒を投げ付ける若者達。

花びらの様に舞うたぐさんの封筒。

女 イイ感じよ、あなた。

笑いながら胸を張る夫と、微笑む妻。

男の笑い声と若者達の歓声が夜空に響く。

警報ブザーもけたたましく。

〜終〜

この戯曲の著作権は、作者である平塚直隆にのみ帰属するものです。
上演許可あるいはその他のお問い合わせは、作者の所属する「オイスターズ」どうぞ。

■オイスターズ■

ホームページ

<https://oysters.official.jp>

メールアドレス

theatrical_unit_oysters@yahoo.co.jp